

18	受験番号
中	

社会 その1(4枚のうち)

次の問題文を読んで、後の問いに答えなさい。

みなさんが買い物をする時、硬貨を使うと思います。1円を除くと硬貨はいずれも同じ金属が主成分で、それは銅です。銅は、硬貨以外にも、その加工の容易さ、熱や電気をよく伝える性質などから、さまざまなものに使われています。日本は、現在でこそ必要な銅の全てを輸入に頼っていますが、過去を振り返れば、長期にわたって主要な輸出品の一つでした。銅は、わたしたちの生活にとっても深くかかわっています。今日は、銅を中心に、日本の歴史や社会について学んでみましょう。

鎌倉時代、室町時代の中国との貿易においても、銅は主要な輸出品の一つに数えられますが、輸出品としての銅の重要性がとて高まったのが、17世紀後半でした。16世紀から17世紀前半にかけて、日本では銀が大量に生産され、それを目指して外国の船が数多く来航するのですが、17世紀後半には銀の生産量が激減したのです。そのとき、銀に代わる輸出品として注目されたのが、銅でした。日本の銅は貨幣の材料として、多くの国でとても重要だったからです。この頃、日本の貿易相手国は中国、朝鮮、オランダなどでした。オランダの場合は、日本で得た銅の多くを、貨幣の材料としての需要があったインドに持ち込み、綿織物を入手しました。この綿織物は、直接オランダ本国に送られたほか、東南アジアで香辛料と交換され、大きな利益をオランダにもたらしました。このように、オランダがつくりあげた世界的な貿易網において、日本の銅は極めて重要な商品の一つでした。そして日本にとっても、ヨーロッパの文化や情報の入手経路として、オランダとの貿易は、重要な意味を持っていました。

この頃の有力な銅山の一つに、伊予国の別子銅山があります。江戸時代の鉱山の多くは幕府や藩が経営していましたが、別子は1691年の開発当初から住友(泉屋)により運営されていました。住友は、別子を経営の中心としながら、他地域の銅山運営も行う大商人でした。他にも幕府が直接に経営する足尾銅山や、秋田藩による阿仁銅山など、大規模な銅山が各地に存在していました。

ただし銅も十分な生産量があったわけではありません。国内でも銅は必要なため、幕府は輸出量を制限し、その代わりに干した海産物の輸出を増やして、貿易額を維持しようとしていました。太平洋に面した鶴原村(現在の千葉県勝浦市鶴原)は、アワビが獲れる漁村でしたが、幕府から干しアワビの生産・納入を求められたことが知られています。村の有力者は、幕府の権威を背景に村内での自身の立場を強め、多くのアワビを集荷しました。銅の生産減少は、貿易とは直接に関係がない村の暮らしにも影響を与えていたことがわかります。

ところで、日本の銅を世界貿易の重要な商品としていたオランダは、銅の輸出制限に不満でした。オランダは、銅の輸出の拡大を求めますが、18世紀末に幕府の指導者だった松平定信は、次のように述べています。

世間の人はオランダ船の来航数を減らすことを問題視するが、反論の必要もない。今は年1艘になったが、1艘に渡すほどの銅もない。貿易額を半減させる政策を実施しなかったならば、どのようになるだろうか。恐ろしいことである。(『宇下人言』より。わかりやすい言葉になおしてあります。)

幕府の指導者がこのような考えだったため、オランダの要望はすぐには認められませんが、結局ほぼ同じ頃に幕府は銅輸出の制限を大幅に緩和することになりました。

このように最も重要な輸出品だった銅の生産は、銅山がある地域に活気をもたらしました。銅の生産には、多くの人手が必要だったからです。その数は、例えば1769年の別子では約四千人いた阿仁銅山は、1885年に民間人に払い下げられましたが、これにより阿仁銅山の技術が、同じ人物が経営する足尾銅山にもものぼっています。この人々は採掘、トンネルの整備、排水、銅鉱石を細かく砕く作業、銅の製錬などいろいろな業務に従事しました。しかし活気をもたらす一方で、銅山は公害も生み出しました。小浜藩が経営していた野尻銅山では、煙害と銅山の廃水の影響で作物の生育不良や漁業の不漁がおきたこともあり、採掘を中止しました。やがて、別子銅山を経営していた住友が小浜藩の代わりとして再開を目指すのですが、地域の人びとの反応はさまざまでした。広い土地を持つ農民の反発が特に強かったといわれますが、土地をほとんど持たない農民やその他の人びとなど、銅山の再開を歓迎する人も少なくありませんでした。

幕末近くには、銅生産はさらに大きく落ち込みます。採掘をすすめるにつれさまざまな困難が浮上し、当時の低い技術力では採掘できない状態になってきたからです。また次第に緊迫する国内外の政治情勢の影響で、幕府や藩の関心が鉄に移った点も、要因として指摘されています。

しかし明治時代になると、貿易赤字に苦しむ新政府が鉱山の経営に力を入れたため、銅山は息を吹き返します。政府は江戸幕府などから没収して直接に経営していた鉱山に新技術を導入し、銅の増産を目指しました。その技術が1880年代に民間の鉱山にも広まって、銅の生産は急拡大します。一例をあげると、政府が経営してにも導入され、大きな成果をあげました。具体的には岩を砕く「さく岩機」などがあります。増産された銅は、世界的に銅の需要が急増していたこともあり、重要な輸出品となりました。近代の大規模産業といえば綿紡績業ですが、銅は生糸や石炭と並んで、ある意味で、綿以上に重要な輸出品だったといえます。

第一次世界大戦頃には、国内の銅の需要も急増します。1909年からの10年間で、国内の銅需要は5倍になった一方で、17年からの5年間で、銅の生産は半減し、日本は銅の輸入国となりました。この頃は、世界的にも銅の生産が低迷した時期でしたが、銅の主要な生産国であるアメリカ合衆国は、より安価な銅の生産に努めます。やや遅れながらも、日本の銅山の経営者も銅を安く生産できるように努力しましたが、賃金の上昇などによりその効果は限られ、国際的な競争力を回復することはできませんでした。国は、重要な物資である銅の国内生産を守るため、輸入する銅にかかる関税を引き上げて、日本の銅を生産する企業が存続できるようにしました。

社会 その2(4枚のうち)

第二次世界大戦後も銅の生産は継続しますが、日本の銅生産を支えてきた別子銅山や足尾銅山も1973年には閉山を迎え、現在では商業的採掘を行っている銅山は国内にはありません。こんにち、銅製品の原料である銅鉱はもっぱら輸入に依存しており、長い歴史を持つ日本国内の銅鉱業もその役割を終えています。私たちにとって銅というものはあいかわらず重要であり続けています。こうした銅の重要性についてあらためて考えることで、私たちの生活などを見つめ直すことも必要ではないでしょうか。

図 別子銅山の坑内(トンネル内)の様子(江戸時代後期)(別子銅山記念出版会編『別子銅山図録』より)



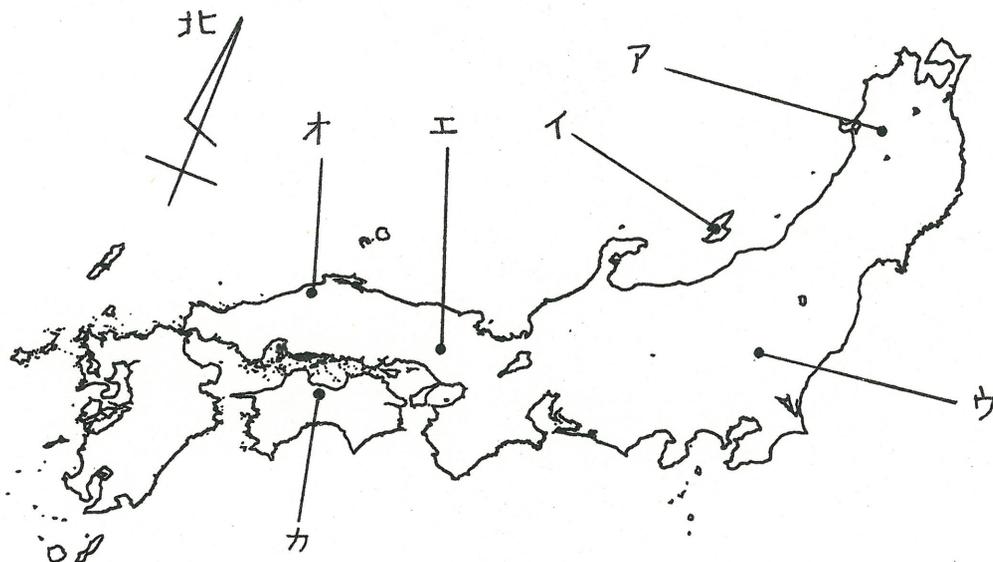
黒丸の中と同じ道具です。
([『日本山海名物図会』より])

18	受験番号
中	

社会 その3 (4枚のうち)

問1 別子、足尾、阿仁は、それぞれどこに位置しますか。下の地図から選び記号で答えなさい。

別子
足尾
阿仁



問2 干した海産物には、干しアワビ、フカヒレなどがありますが、輸出先の国を答えなさい。

問3 江戸時代の銅輸出について、以下の問いに答えなさい。

(あ) 松平定信は、貿易額を半減させなければどうなると心配していましたか。

(い) 18世紀末に、幕府がオランダの要望にそうかたちで銅輸出の拡大を認めたのは、なぜでしょうか。当時の日本に近づくようとしていたヨーロッパの国の名前をあげて答えなさい。

問4 銅山の再開について、以下の問いに答えなさい。

(あ) 広い土地をもつ農民の反発が特に強かったのはなぜでしょうか。公害以外に理由として考えられることを書きなさい。

(い) 銅山の再開を「歓迎」した人びとが期待したのはどんなことでしょうか。

18	受験番号
中	

社会 その4 (4枚のうち)

問5 銅山をほりすすめていく上で、どのような技術的困難があったことが図からうかがえますか、問題文もよく読んで説明しなさい。

問6 下の表は主要品目の輸出入額順位を示したものです。それを見て、輸出品の「銅・石炭・生糸」に共通し、「綿糸・綿織物」にはない利点とは何か、答えなさい。

表 主要輸出入品の上位6品目

輸出品上位6品目

	1位	2位	3位	4位	5位	6位
1898(明治31)年	生糸	綿糸	石炭	絹織物	茶	銅
1903(明治36)年	生糸	綿糸	絹織物	石炭	銅	茶
1908(明治41)年	生糸	絹織物	銅	綿糸	石炭	絹織物
1913(大正2)年	生糸	綿糸	絹織物	絹織物	銅	石炭
1918(大正7)年	生糸	絹織物	綿糸	絹織物	銅	石炭
1923(大正12)年	生糸	絹織物	絹織物	綿糸	石炭	茶

輸入品上位6品目

	1位	2位	3位	4位	5位	6位
1898(明治31)年	米・ ^こ 粳	綿花	砂糖	機械類	鉄類	綿布
1903(明治36)年	綿花	米・ ^こ 粳	砂糖	鉄類	石油等	綿布
1908(明治41)年	綿花	機械類	鉄類	油かす	米・ ^こ 粳	砂糖
1913(大正2)年	綿花	鉄類	米・ ^こ 粳	油かす	機械類	砂糖
1918(大正7)年	綿花	鉄類	油かす	米・ ^こ 粳	機械類	砂糖
1923(大正12)年	綿花	鉄類	油かす	機械類	砂糖	小麦

東洋経済新報社編『日本貿易精覧』(増補復刻版)より作成

[注]油かす……植物の種子から油をしぼったかすのこと。肥料に用いる。

問7 19世紀末から20世紀前半にかけて日本や世界各地で銅の需要が増大したのは銅線が大量に必要なからですが、その背景には私たちの日常生活をふくめた社会や経済を大きく変化させることになった技術の普及がありました。

(あ) その技術とは何ですか。いくつかあるうちの1つを選んで書きなさい。

(い) 上で解答した技術の普及によって、社会または経済がどのように変化したのかを説明しなさい。